

経済学部や経営学部といった文系学部には、「イノベーション・マネジメント」と呼ばれる講義科目がある。技術や技術的な革新を意味する「イノベーション」という言葉を耳にすると、理系学生の問題で、文系学生にとっては無縁だと思いかもしれない。本稿では、なぜ文系学生が技術やそのマネジメントについて学ぶ意味があるのか考えてみたい。

## 技術と文系人材の関わり

くの場合、技術発展の方向性や、その進捗速度は、技術に関わるさまざまな主体（個人、企業、政府など）の意図や歴史に大きな影響を受けている。

たとえば、19世紀後半における自転車の前輪は、後輪に比べて極端に大きなものだった。なぜなら、自転車とは、レースを行って「男性らしさ」を表現するための手段という解釈があったからである。その後、

老紳士や女性にとっても「安全な移動手段」であるという解釈が生まれ、現在のような前輪と後輪のサイズがほぼ同じ自転車が生み出された。

現在、薄型テレビの技術は液晶方式が支配的であるが、薄型テレビ市場が誕生した2000年代はじめてころ、プラズマ方式と競合していた。つまり、どちらの技術が市場を支配するか誰もわからなかった。だからこそ、それぞれの技術陣営は、テレビCMなどの広告や強気の設備投資を行い、あらゆる方面に対して「われこそが本命である」とアピールしたのだろう。

このような企業行動がとられるのは、技術の将来像が事前に、あるいは「客観的」には不明確だからである。そうでなければ企業間において駆け引きは生まれない。将来がわからないからこそ、顧客に対して当該技術が社会を変えるといったイメージを作ったり、技術発展のための仲間を作ったりといったマネジメントが重要になるのである。

# 社会的要請、企業行動

## つなげる役割

技術というものは、日々の研究によって科学的・技術的な知識が積み重ねられ、進歩していくと捉えられがちである。しかし、多



名古屋市立大学大学院  
経済学研究科講師

大神 正道

生物質であるペニシリンは、その発見から実用化まで10年以上かかっているが、時間が必要だったのは技術的な理由が主ではなかった。第2次世界大戦が勃発し、イギリス政府が感染症の特効薬を必要とするまで研究に関する支援がなかったからである。このように技術進歩の方向性やその速度は、時代や環境によって変わっていくのである。

また、誕生した技術が、支配的になるかどうかについて、事前に「予測することとは難しい。

技術は、人々の関心と無関係に進歩するわけではない。誕生当初からその将来が決まっているわけでもない。技術に対する人々の解釈や、社会的要請、企業行動といった社会的要因が、技術進歩の速度や方向性に対して大きな影響を与えている。

開発された技術が勝手に普及しないからこそ、社会を科学する訓練を受けた文系人材が必要になる。彼らこそが、技術と社会的要請をつなげる役割を担うのではないだろうか。

おがみ まさみち 技術マネジ  
シメント。東京大学大学院経済学  
研究科博士課程単位取得満期退学  
・修士（経済学）。1980年生  
まれ。

